

## 論文審査の結果の要旨

|      |                                      |     |         |
|------|--------------------------------------|-----|---------|
| 報告番号 | 甲 保<br>第 39 号<br>乙 保                 | 氏 名 | 横 井 靖 子 |
| 審査委員 | 主 査 葉久 真理<br>副 査 谷岡 哲也<br>副 査 奥田 紀久子 |     |         |

## 題 目

Factors related to the occurrence of phlebitis in acute phase stroke patients receiving intravenous nicardipine hydrochloride as antihypertensive therapy (降圧療法としてのニカルジピン塩酸塩を使用する脳卒中急性期患者の静脈炎発症の関連要因)

## 著 者

Yasuko Yokoi, Takako Minagawa, Ayako Tamura

2019年12月 Journal of Japanese Academy of Neuroscience Nursing, Vol.6, No.1  
3-13 ページに発表済

## 要 旨

カルシウム拮抗薬ニカルジピン塩酸塩(ニカルジピン)注射薬は、脳卒中急性期の速効性降圧薬として多くの施設で用いられているが、本剤持続静脈内投与による静脈炎発症頻度が高く、患者の生活の質(QOL)を低下させている現状がみられる。静脈炎発症予防として、ニカルジピンの希釈投与や、留置カテーテルの交換時期等について提言されている中、本研究では、患者生命の危機回避のために高濃度、長時間、早い速度での投与が避けられない脳卒中急性期患者を対象に、ニカルジピン持続静脈内投与中の静脈炎発症の関連要因を明らかにした。Stroke Care Unit (SCU) を備えた総合病院でニカルジピンの降圧治療を行った92名を対象に、後ろ向き調査によりデータを得た。静脈炎発症有無別の単変量解析では、Glasgow Coma Scale (GCS)による意識レベルの言語反応および運動反応、初回挿入時平均血圧、拡張期血圧差、投与時間、投与量、投与速度、希釈倍率で有意差を認めた。多重ロジスティック回帰分析では、ニカルジピン持続投与時間が有意なリスクであった。本研究結果は、脳卒中急性期患者で、意識レベルの言語反応および運動反応の得点が低い者、初回挿入時平均血圧が低く、拡張期血圧差の大きい者を静脈炎発症リスク対象者として特定できることでその発症を予防し、患者のQOL低下予防に貢献するものと評価できる。

論文審査の結果、博士の学位授与に値するものであると判定した。